

中山誠記 著

# 『食生活はどうなるか』

内山政照

## 著者の姿勢

これは、はなはだ挑戦的な本である。

「食料は国内で増産しなければならぬのである。戦後一五年にわたって行なわれてきたよりも、一層大きなスケールにおいて、なお食料の増産が必要なのである。いまわれわれの目の前にチラつてゐる供給過剰の幻影は、一つは方向を誤った戦後増産政策によるアンバランスな供給構造から起つてゐるものであり、一つは食生活の変貌がレールに乗るまでの、一時的な混乱の姿と解すべきものでは、ないだろうか」(九七ページ)。

挑戦の相手は「供給過剰の幻影をチラ」つかせている人々——いたずらに古い学問の公式をふりかざして、現実の動向を著実・謙虚につかまえ、そのうえに将来の発展を予測することを忘

書評 中山誠記著『食生活はどうなるか』

れている学者たち。「方向を誤った戦後増産政策」をきびしく反省せずに、ズルズルベッタに流されている役人たち。そして著者が背中の上しろに囲んで、彼らの挑戦から護ろうとしているのは、一九六〇年の発展する農民たち。「食料は国内で増産しなければならぬのである」「貿易自由化の嵐も、たしかにきびしいであろうが、よくみれば、その前途に明るい光を認めることも、できなくはないのだ」(一九八ページ)と、著者は肩いからせ、マユつり上げてこの農民に向つて力説する。

その方法 著者の方法は、「始めに事実<sup>タート</sup>ありき」。いたずらに学問的概念をもて遊び、学問的体系の完結性を第一義として狙うことにならない。データの累積のなかから、「油をしぼり出すように」主張の線をねじり出していく。そのためには、栄養科学ないし労働科学や農学上の、恐らくは著者にとっては不慣れた技術的なデータにまで、たんねんにさかのぼって倦まない。少なくともこと主題の食糧問題に関する限りは、アルファからオメガまで、事実<sup>タート</sup>なきことばを、峻厳に拒否しようという、著者一流の強靱さが、この一本の紙背に遺憾なくおどつてゐる。

いっぽう、データの累積はそのままではゴミ箱のなかのゴミの累積にすぎない。そのなかからいかにして宝を掘り出すかは、いうまでもなく、著者の触角の角度いかんにかかるといふ。いたずらに一部のデータにひきづられて、データの底にあるものを、

見失なうことは、著者のまたきびしく警戒するところである。たとえば、資源調査会「日本人の食糧構成」などが、昭和三年にそれから一五年後に到達すべき目標として示した食糧構成の水準は、目標年次の一〇年まえの近年、すでに到着してしまっている。これは「これまでの常識では解釈のつかないものである」(八六ページ)。「単純な現状分析の結果をそのまま引き伸ばして、将来を予測することは、誤まりだ」(八四ページ)。食生活の革命的变化が始まっているからである。「これまでの常識」によりかかって、データをかきまわしている、役所ふうの無理論主義に対しても、著者の筆勢は鋭く挑戦する。

そこにも、筆者のはげしい叛骨精神が流れている。

その根柢にひそむもの それでは事実と論理、『詩と真実』

の果しない振子運動を、著者はどこで止めようとするか？ そのときの著者の触角は何か？ そこには必然的に、アブリオリなもの、人の生まれた星……が入ってこざるをえないのだが、著者のばあい、それは何か？ それは私には、「食生活はどうなるか」というより「どうするか」という、著者のすぐれて実践的なもの、という感じがする。

たとえば、経済審議会「日本経済の長期展望——二〇年後の日本経済——」が、二〇年後のエンゲル係数を三六パーセントと展望しているのを、著者は「決して不合理ではない」という。

そしてこの著者の判断の根柢は、本書の前半を費して論証した、食生活革命論である。だがそのとき三六パーセントになるか、ないしはたとえば三〇パーセントに止まるか、それは著者といえども確言できないのは、いうまでもない。だから著者自身も「将来の国民生活において、食生活部門がこの程度の向上をみると想像することは、決して不合理ではないと、思っている」(八五ページ：傍点書評者)と、はなはだ用心深いことばづかいをしている。このとき恐らくは著者の内心に「詩と真実」の葛藤があったことが、ここに表現されているのかもしれない。しかしけっきょく著者は「その根柢の明示されていない」「このような高い見積りを」断乎として採用するのである。

そこには「日本人の食生活を西欧水準並みに引き上げる」ないし「そうすることが望ましい」という、市民中山誠記が顔を出している、と思うのは、私の思い過ごしであろうか。そこには、米価の算定方式に関して生産費所得補償方式のほうが「再生産を償い、生産者に都市と同じ所得を実現させようとするもので、これに含まれている理論的、あるいは倫理的なバックボーンは、全くの便宜主義から出発したパリティー方式に較べて、はるかに優れたものである」(一三六ページ)とした、同じ理論的倫理的バックボーンが通っている。

この著書を独得のものにしている、著者の根柢にひそむもの

は、中山氏のばあい、たんにこのような「新書版」に露出しているばかりではない。比較的卒直に研究論文にも出ているように、私には思われる（例えば『本誌』一四巻四号所載のノート「大・裸麦の飼料化について——麦糠専門工場の提唱」）。

著者の踊り場はここだ。

**私の立場**　ところで、世に書評と称せられているものには、ある種の偏ったタイプがステレオ化していること、それが多くのばあい、内在的批判になっていないで、書評者の踊り場に対象の著者をひきづりこむにすぎぬ点を、私はかつて指摘した（『総研月報』一四二号、昭和三五年八月号、拙稿、「書評の書評」）。

先頃かいたこの自説に忠実ならんと欲すれば、私はここでこの著者の踊り場自身のなかに、我が身を投身させる覚悟が必要となる。だが、卒直にいつて、私自身はいまその実力と何よりもその覚悟とを欠いている。いや、按ずるに、私の生れた星はどうも著者のそれとは、遠く距っているように感ずる。どうもその気が起ってこないのも、その所為だろう。ということになれば、私はここまできて書評のペンを捨てるのが、自己に忠実なる所以。

そこで以下は、書評ではなく、私がこの本をよんで喚起された個人的感想を書き並べたにすぎない。

## 書評　中山誠記著『食生活はどうなるか』

感想Ⅰ・パターンとレベル　主として都市に現に進行して

いる、食生活の新しいパターンを強調したあとで、「その中には、久しい期間にわたって、日本人の食生活水準を低からしめてきた、厚い壁を破るような発展の契機もたしかに含まれているが、現状に於てはまだ、表面の波立っている割に、このような変化の底は浅い。パターンの変化が先に立って、水準としての上昇がまだ本格的に進行し始めていないともいえる」（九ページ）という。逆に、農家については、「水準としては、かなり水際立った上り方を示しながら、基本的パターンの変化は、まだ芽生えていない」（六四ページ）という。それは何故か。

都市には戦時戦後の深刻な食料難があつて、伝統的なパターン（<sup>パタン</sup>）こめ単食型態が強制的に外からの衝撃によって破かいされた。これに対して農村にはそのチャンスが与えられなかった、ことに、その主たる理由がある。これが著者のユニークな論点だ。

著者のパターンとレベルの概念が、もし形式と内容という一般概念におきかえられうるものとすれば、この指摘はいっそう示唆的である。すなわち、「形式過剰、内容不足」の都市社会に対して、「形式不足、内容過剰」の農村社会（習俗社会）の本質が、ここに一つの表現を示しているからである。著者のいう都市における戦中戦後の深刻な食糧難云々は、その本質實現のひとつのき、つかけを与えたにすぎぬとも読みうるからである。

感想 2・コメの哲学 日本は世界でも最低のお粗末めしを喰いながら、なぜ満足しているのか。何故もつと食物への強い慾求が起らないのか。

この秘密を解く鍵は米のめしばかり好んで食う、米単食といわれる日本人の食型態にある。それはけつきよく、日本米が食品として備えている特有の性質に、大いに関係がある——というのが、著者の考えだ。こうだ。

①「白いごはんさえあれば……」というこ、とばのとおり、日本人にとって米（内地米）は副食を添えなくとも、それだけでけっこうおいしく食べられる。パンなどは「人はパンのみにて生きるにあらず」バター・肉などの副食がほしくなるが、日本人は「めしのみにて生きる」ことができる。米は単食に適する食品なのである。

② 副食のいらない分だけ安あがりのうえに、パンとちがってめしはすべて自家製で加工賃もほとんどかからず、カロリーも高い。その点で米はど安くてうまい食品は珍らしい。ほんとうは「貧乏人は米を食」った方が、得なのだ。

③ だがその反面、副食をこちそうにしても——栄養は大きくなるが——味覚の満足の度合いは、その割には大きくならない。高級料理の味も、ときに一ぱいのお茶づけ、おむすび、一個の味に及ばないこと、ご承知のとおり。米食はいわば料理に

対する味覚弾力性に乏しい、金やテマのかけ甲斐のないもの。その意味で発展性に乏しい食型態だ。

パン中心の粉食はその反対。お茶づけ並みの単純な献立では、とても食べられたものではないが、材料とテマをかけさえすれば、それなりに複雑な、おいしい味を出すことができる。つまり、甲斐性のある弾力性の大きい型。

④ というわけで、日本人はずうっとめしの一つの味のワタのなかに、閉じこめられて生きてきた。森のなかにいる人が森ぜんたいを知らないように、味の遍歴を経てこなかった日本人は、実は「味の味」うまいものを食べる楽しみを、知らずに過してきたのではないか。さし当りさつまいもやかぼちゃがほんとは一ばん好きだ、という家庭の主婦たちなど、その見本。これでは食物に対する、強い慾求が起るはずはない。

そんなわけで、われわれは米のうまみと強みによりかかって、——この傾向は農村にもつともはなはだしい——今日まで何とかめしを食ってきた。だが実は、この強みがかえって弱味となり、世界でも最低の食生活で満足する、その根本原因となったという。

これが著者の米食哲学である。

もう一つの例。「生活行動と食生活水準との連鎖反応」（七六ページ）。つまりたんに歩くという同じ動作をしても、日本人

はシャナリシャナリと歩くから、チャツチャツと活潑に歩く外人に比べて、その消費エネルギーが二〇パーセントから三〇パーセント少ない。それは単調な米食型態からきたもの。逆にいうと、肉や牛乳を主にした食生活様式に変われば、日本人だってチャキチャキ歩くようになる。

これも興味深い著者のコメの哲学である。

いずれも著者独自の発想法による、面白い観察である。だが米の味ない嗜好、および米の単食という技術的事実 (Substanz) とが、ここでは短絡されていないか。なるほど著者は、例えば「食べるという行為」(八三ページ)について、それが経済的要因(所得)に大いに左右されることを、強調しているし、それ程の重みをおいてはいないが、社会的要因を無視しているわけではない(例えば、六四ページおよび八三ページ)。また「食生活の将来に関して、常に議論になる、米食か粉食かという問題」は、ナンセンスである(九二ページ)。告発さるべきは米ではなくて、八米だけを食べる√米単食型態にある、と指摘している。

しかし少なくとも前に指摘したような個所では、技術的要因のウェイトが、異常に重くかかっているように思われる。そこは分析でなく、ひとつのエピソードだ、というなら、話は別で

あるが。社会学者が技術的データを扱うさいに往々見られるように、「となりの庭の花」を賞する余りに、わが庭の花を忘れるおそれが、ここに見られはしまいか。

感想 3・社会的行為としての食事 食事を食事行動 (Food behavior) としてとらえようとするばあい、次の三つのカテゴリーがある、とジンメルマンはいう (C. C. Zimmerman: Consumption and Standards of Living 1936, p. 57)。①「食べもの」といわれているものだが、命を維持するためにとる栄養。②消費者に食糧を供給するための仕事とその他の経済的コスト。③食べるということに関係する。いわゆる食慣習 (food Customs) と称せられるところの、非経済的行為 (例えば料理の皿数、食事の時間、食事サービスの仕方、飾り、その他食事に關する行事<sup>セレモニー</sup>など)。

この第三のカテゴリーに属する観点に関して、たとえば日本人の食行動への無関心が、注目されねばなるまい。著者によれば、それは前述のように米単食という型、さらに米の料理に対する味覚弾性の小ささに、帰せられるところ大きい、私には次のような視点も忘れられてはならぬと思われる。

外国の話をきくと、家族が食事をともにするという行為が日本人の気持からするとわからないくらい、重大なことと考えられているらしい。逸見氏の話では、アメリカの大学教授は夕食

ないしはひるめしに必らず家庭にもどる。夜研究室に戻ってき  
て、おそくまで勉強をするとしても、めしどきには「たん家庭  
に帰える、というのである。一日一べん家族とともにする朝食  
の食卓で、私たちが朝刊をひろげながら、子どもや奥さんの話  
をうわの空で聞き流す、のとは大きなちがいがあろう。鍵のかか  
る室に、それぞれが私生活<sup>プライベート</sup>をもち、子どもの頃から個人とし  
ての訓練を受ける欧米の家庭では——日本ではフスマを開けれ  
ば、全家族員が目に入る、——せめて食事どきが、家族員の結  
合を確かめ温ため合う稀有なチャンスだからであらうか。

その意味では食事はたんに食欲を満たすとか、あるいは家庭  
の団らん、楽しみ、というような次元を越えて、宗教的な意味  
をさえもっているはずである（C. C. Zimmerman, *op. cit.*, p.  
83）。夕食には服装を正し、まず伸に折ってから、食事をとも  
にするという習慣は、そのあらわれ。「かまどの火は、世代の  
交替に関わりなくつづく家の生命力としての意味をもち、食卓  
は心身の維持と更新のために、いまの家族員を結合するものと  
いう意味をもつ」（「テニエース」『ゲマイシヤフトとゲゼルシャ  
フト』）。

日本ではどうか。日本ではいまの家族員は世代の交替に関わ  
りなくつづく「家」という第一次形象のもとにある、第二次形  
象にすぎない。いいかえれば現存家族員の結合は、「家」形象

を媒介にして既に保証されている。その意味で敢て共食という  
社会行動を伴なう意味は、より小さいといってもよい。だから  
箱膳という形で、個々別々に食事をとる習慣は、いまでも農村  
では珍らしくないし、一般の家庭では食事前の祈りを欠いてい  
る。その点では著者のいうように、食事は「食べる仕事」（四  
八ページ）生存のための食糧流入作業だ、といっても過言では  
なからう。

これに対して、衣食住のうちでいえば、住や衣のほうにウェ  
イトがかかり易い。外に見えるもの「家」の姿にウェイトが  
かかって、見えない個々人の用である食事は、二義的になっ  
てしまふのだらう。「食事などは食べてしまえば消えてしまふの  
だから、つまらないじゃないか」というわけだ。中山氏が西ド  
イツの家計に比らべて、日本では雑費支出が異常に高く、食費  
のウェイトがきわめて少ない、という指摘をしているが（二七  
ページ）、この根拠にはこうした行動様式の基本的ちがいがあ  
るのではないか。

逆というと、「家」の姿があらわれる食事の場合、冠婚葬祭の  
さいのいわゆる膳<sup>へし</sup>の食事（柳田国男氏）は、ふだんのケの食事  
と全く対照的な、賑やかさである。「お頭<sup>かしら</sup>つきのタイ」「色をつ  
けたカマボコ」……ふんだんにアクセサリーをつけたご馳走を、  
絶対に食べきれないだけ多量に出す。それはこの共食が、むしろ

る社会的、宗教的意味をもつことを、もっとも端的に象徴している。そこでは、「家」と「家」との結合が計られているからである。行事の食事は、ふだん抑圧された食生活への慾望が煮詰められて、こういう形になった、という著者の説明（四八ページ）は、たんなる心理的説明にすぎない。

「同じカマのめしを喰ったなかま」ということは、家の内ではなく、むしろ家のそのの寄宿舎や宴会で、それまで見知らぬものがそこで始めて相知り合うチャンス、重大さを表明している。家の内では更めて同じカマのめしを喰って、結合を確かめよう必要はない。それは既に「家」形象で十分なのだ。

そういう見方からすると、食生活の欧米水準の接近は、日本における近代家族の成立いかんにかかわるところが大きい、といえないことはない。著者が本書の最初のほうで説いている、新しい生活の原理——生活活動における時間（家事労働と余暇）の経済価値への換算ということは、こういう近代家族によって支えられる原理に他ならない。

**感想4・食生活における自己疎外** 近代家族にみられる「楽しむための趣味の食事」と「栄養のためのルーチンとしての食事」の分化傾向（六ページ）の指摘は、興味深い観察である。だがその趣味や楽しみは、現実の社会では歪んで実現してはいないか。

たとえば、その種の食事は多くのばあい、家庭の外で「食堂産業」のアテガイブチ商品を購入する形で、実現している。

となると、それはたんに食べる楽しみというより、「ホテルでデラックスなディナーをとる」ということが基準パターンとなるであろう。ここには食事における「近代人の疎外」（パッペンハイム）がみられるにすぎない。またそこには食べることは「精神と食物とを食べることだ」という、精神の喜びが伴うだろうか。友がおり子が唄い、いろりの火がチロリチロリと燃える、そのなかで料理に体化した家族の味を味わうようなことが、期待できるだろうか。

この種の「動物的な」食事にくらべると、農村に見られるときたまの外食ははるかに「人間的」である。となり近所の人を誘い合せ、手料理をつめた重箱をもって遊山に出かける。そこにこそ精神とともにする「楽しむための、趣味の食事」がある。また食生活水準の高い国、たとえばアメリカなどでは、むしろスマートになりたいためにヤセルための食事が盛んだという。食生活が本来の位置を与えられるには、現代社会それ自体の問題が解かれねばならないのかも、しれない。

**感想5・生活の発見** ともあれ「生活」とはかつて「生きる」ことと同義であり、また衣、食、住……という行為の断片としてのみ、理解されてきた。しかし今日、その間から「生活」と

書評 中山誠記著『食生活はどうなるか』

いう抽象的集合体（抽象的イデー）が成立しつつあるように思われる（拙稿「生活の発見」『農業及園芸』三五の三）。中山氏のこの著書の出現は、その生活発見時代の、恐らくはもっとも先駆的な労作とみてもよからう。